

ふたたびの喜び



水野亨

すいそうすいそうすいそうすいそ
すいそうすいそうすいそ
すいそうすいそ
すいそ
すい

理科室での授業を終わり、職員室に帰ろうとして廊下を歩いていると、「先生、足、けがしたの?」と、声をかける女の子がいる。みると、この四月に入学したばかりの一年生である。一瞬、どう答えたらいか迷っていた私に、「痛くない?」と言ひながら、私の顔をのぞきこむ心配そうな子供の顔。

「大丈夫、もう痛くないよ」と答えると、安心したようになつて笑つて、教室に入つて行った子供の後ろ姿を見つめているうちに、目頭が熱くなってきた。

このように、やさしく思いやりのある子供達に囲まれて、教師としての仕事は、だれにも迷惑にならないでいいの

事が続けられることの幸せに。私は、現在、骨髄炎のために左大腿部を二分の一以上切断し、義足の生活をしている三級の身体障害者である。昭和五十五年の一月、左大腿部の骨髄炎のために入院した私は、四回の手術にもかかわらず病は治癒せず悪化するばかりであった。そして、十月の末「このままでは、他に病菌が転移してしまうので、今のうちに大腿部を切断しないと駄目です」と、主治医に宣告された。ショックで、目の前が真っ暗になつた。

もう、これで教師として再起することなんて不可能だなと思ひ気持ちと、片足だけの人生なんて生きていく価値があるのだろうか、死んでしまつた方が、だれにも迷惑にならないでいいの

ではないかななどと思ひ悩み、その夜はなかなか眠れなかつた。

次の日、医大からおいでになられた本多医師が回診され、「気持ちの整理はつきましたか。自分の身体の一部を失うということは大でもつらいことなのです。そのためを乗り越えて社会に復帰することができるかどうかは本人の精神力なのであります。片足がなくなるくらいがなんですか。それよりもっとひどい障害の人がありますよ。あなたたって、きっと学校に大勢社会に復帰してがんばっているのと、話された。

一晩、悩み、苦しんだ自分が恥ずかしかつた。

十一月二十日、私の左足は大腿部をほんの少し残してなくなつた。

翌年一月八日、訓練用の義足ができる。早速、身につけ歩こうとして歩しか歩けないので、がっかりして歩をかいたら、義足製作の人が、

「初めて義足をつけた人で、歩けた人はあまりいないですよ。立つのでさえやつとの人が多いのに、少しでも歩けたということはすばらしいことですか」と、励ましてくれたので、なにか自信がわいてきた。

次日の日から、病院の廊下で歩く練習をはじめた。二週間ぐらいは松葉づえで歩いたが、その後は一本のつえで歩けるようになつてきた。うれし

ではないかななどと思ひ、その夜はなかなか眠れなかつた。

次の日、医大からおいでになられた

本多医師が回診され

「気持ちの整理はつきましたか。自分の身体の一部を失うということは大

く練習をした。

二月十三日、主治医より外出の許可

があり、家内に付き添われて病院の周りを歩いてみた。道路は凸凹があり、歩きにくかつたがどうにか歩けた。はじめのうちは回りの人を見られているようでも気おくれがあったが、一日も早く社会に復帰したいと思う気持ちがそれに打ち勝つたのか、歩くことに専念できるようになった。

「病院で手当することはもうなにできません。あとは、あなたの努力だけです。退院してよろしいです」と、主治医から退院許可がでたのは三月一日だった。

退院してから間もなく、町の教育長さんと校長先生がお見えになり「復職できるように手続きをするから、心配しないでがんばるよう」と、言つてくださいましたときは、とてもうれしかつた。そして、関係各位のお骨折りで教職に再び戻ることができ二年が過ぎようとしている。

復職後の私の毎日は充実感で一杯である。それは、職場のみなさんをはじめ、大勢のかたがたの暖かいはげましと援助、そして、子供達の思いやりの気持ちに支えられていることと、身体に障害があつてもくじけまいとする自分自身との戦いがあるからである。